

【ポスター発表】

医学生を考える高齢者像についての分析

—養成施設での分析—

○ 鳥取大学 細田 武伸 (8271)

キーワード：医学教育、高齢者像、高齢者福祉

1. 研究目的

日本の大学生を対象とした「高齢者像」に関する報告は少なく、その中でも Negative な印象を持っているという報告が多い。Ogiwara らは、1997年と2007年の品のテレビCMを比較した結果、50歳以上と思われる者の登場する割合は、とりわけ男性で増加しているが、人口の高齢化ほど、かれらの出演頻度が増加していないことより、テレビCMで真の高齢者といえる65歳以上の者の出演が低いことは、視聴者の高齢者に対する否定的態度を助長することが否定できないと報告している。一方、今日の医学教育では、文部科学省から公表された「医学教育モデル・コア・カリキュラム」が全国の医学生の教育の基準となっていることもあり、入学早期から、福祉施設、病院施設を見学や体験させることで医学生としての心構えを身につけさせることが一般的になっている。このため、高齢者に接する機会がモデル・コア・カリキュラム導入以前より多くなったと思われるが、彼らが高齢者像をどのように捉えて、高齢に伴う心身の変化と疾病との関連を理解しているのかが十分に明らかになっていない。そこで、まず福祉施設及び医療施設の見学を終え、専門医学教育導入時にて、社会保障制度を学ぶ前の学生が高齢者像をどう捉えているか調査することを本研究の目的とした。

2. 研究の視点および方法

本研究の視点は、医学教育の導入教育において福祉施設等で高齢者に接した医学生が高齢者像をどのようにイメージしているかを把握し、専門医学教育開始時の時点で彼らにどのような学習の援助が必要であるか推定することにある。

本研究の方法は、2011年10月のT大学医学部医学科2年次秋学期開始時の「社会環境医学」の講義に行った、アンケート調査の結果を分析することにより行った。従って対象は、T大学医学部医学科2年次に「社会環境医学」を履修している学生100名（男性68名、女性32名）、年齢は19歳以上35歳未満である。アンケートは、授業開始時に出席票を兼ねて「あなたの考える高齢者像を記述しなさい。」というテーマで、自由記述方式で実施した。分析方法は、Bishu らが行った調査の分類に従い、以下のように回答した言葉を、質的データから量的データに変換して分析を行った。「Positive な回答（以下、Positive と略す。）」、回答例、「生きる知恵を多く持っている。」、「仕事を退職して第2の人生を歩んでいるなど。」と、「Negative な回答（以下、Negative と略す。）」、回答例、「日常生活

に支障をきたすことが多い。」、「複数の疾患にかかりやすい。」などと、「Not positive and negative な回答 (Not positive and negative と略す。）」、回答例、「時間に拘束されず自由であるが一方で時間をもてあましている。」、「年金にて生計をたてている。」など、に分類した。統計解析には SPSS for 19.0 を使用し、男女間の相関関係を分析した。

3. 倫理的配慮

本研究のアンケート用紙は、出席票を兼ねたものであったため、出席票の個人名及び学籍番号を記載された部分を切り離し、アンケート部分のみを入力し分析に使用し、個人が特定できないように個人情報に配慮した状態で行った。

4. 研究結果

高齢者のイメージに関する言葉の数は全部で 133 語であった。この内、Positive は 20 語、Negative は 199 語、Not positive and negative は 94 語であった。性別では、男性では、Positive は 16 語、Negative は 128 語、Not positive and negative は 6 語であった。女性では、Positive は 4 語、Negative は 71 語、Not positive and negative は 88 語であった。Spearman's rank correlation coefficient は、有意確率が 0.667 であり、性別間で有意な差はなかった。

5. 考察

本研究では、全体では、Negative は Positive の約 10 倍であった。性別では、男性は 8 倍、女性では約 18 倍であった。T 大学の医学生が学ぶカリキュラムでは、1 年次は、4 月～7 月末の間に「早期体験・ボランティア」演習にて、福祉施設等で 2 日間のボランティアを行い、その後医学部附属病院見学や、地域の病院や診療所の見学を行う。2 年次は、4 月～5 月末までの間に「ヒューマンコミュニケーション」演習にて、介護老人保健施設に入所している高齢者と直接触れ合う。このため、日常生活を除くと入院や通院をしている高齢者や介護老人保健施設に入所している高齢者と接する機会が多いとも考えられる。このため、健康でない高齢者が病理モデルとして非常に強く印象づけられた可能性がある。すなわち、我が国の大部分の高齢者は入院をせず、通院回数も少なく、介護を受けず自立した生活を送っているが、そのような高齢者と調査対象者である医学生は接する機会が非常に少ないことが調査結果に反映されていることが考えられた。従って、今後の医学生の導入時の教育において、高齢者の多くは自宅で自立して生活しているという生活者であり、かつ加齢に伴う老化を正しく理解できるために、生活モデルの視点を入れた教育の援助が必要であることが推定された。但し、本研究は単年度の養成校 1 校のみの調査結果であるため、今後数年に渡り同様な調査を複数の養成校で行う必要性がある。